

青年期における親から友人への愛着対象の移行と

心理的自立の関連

高橋 舞 (教育学研究科修士課程臨床心理学コース)

高橋 靖子 (心理講座)

Relationship between transfer from parents to friends as attachment objects and psychological independence in adolescence.

Mai TAKAHASHI (Master's Course in Clinical Psychology,
Graduate School of Education) and Yasuko TAKAHASHI
(Department of Psychology, Aichi University of Education)

要約 現代の日本において青年の心理的自立の過程は変化しており、親子関係を基にして再検討することが必要である。本研究では、親から友人への愛着対象の移行を介して心理的自立が達成されると仮定し、大学生および専門学校生に対して質問紙調査を行なった。そして、親への愛着機能の過去から現在の推移と友人関係機能の2つの要因が心理的自立の状態に及ぼす影響を検討した。その結果、親や友人との関係が良好であること、または安心感を得て互いに学び合うような友人関係を持つことによって、心理的自立が高まることが示された。過去と現在の親への愛着関係得点の変化は、自立に対してほとんど影響を与えていなかった。自立の時期には、多くの青年が親への愛着機能を維持しながら、友人との良好な関係を築くことが示唆された。

キーワード：愛着対象，心理的自立，友人関係機能，移行

1. 問題と目的

1-1. 青年期の心理的自立

青年期とは、児童期と成人期の狭間の時期であり、子どもでもなく成熟した人間でもない移行期にあたる (Hollingworth, 1928)。子どもから大人への移行期に親からの自立を果たすことは、青年期の重要な発達課題である。しかし近年、「引きこもり」や「ニート」といった、親からの自立が達成できず、依存し続ける青年の存在が注目されている。このような青年期が延長する現象は一般的にみられるようになり、現代青年の自立の過程に関わる調査が求められる。

自立は社会的自立、経済的自立、精神的自立など、複数の概念から捉えられてきた (福島, 1997; 大石・松永, 2008)。特に発達に伴う心理的自立について、高坂 (2003) は、「成人期において適応するために必要な心理・社会

的な能力を備えた状態」と定義し、心理的発達に関わる複数の側面から構成される概念であると述べている。心理的自立について、高坂の作成した尺度では、「価値判断・実行」「自己統制・客観視」「現在把握・将来志向」「適切な対人関係」「社会的知識・視野」、さらに「責任」を加えた6側面を捉えている (戸田・高坂, 2006a; 戸田・高坂, 2006b)。心理的自立は経済的自立との関連が示唆されており (高坂, 2018)、自立について重要な側面である。

従来、自立とは親からの分離と捉えられてきたが、依存関係から自立へは一直線上にはなく、移行していくものではない。特に日本では欧米諸国と比較し、人間関係を基盤とした自立を持つという見解 (福島, 1993) がある。自立は依存を土台としており、年齢と共に現れ方が異なるだけで自立は依存の側面に埋没せず、それでいて

周囲との分断を図るのではなく、分離と依存が併存する状態にあるとされる(鯨岡, 2002)。このように依存関係の在り方と自立の達成は、密接に関連している。

1-2. 心理的離乳からみる心理的自立と親との関わり方

青年期は親の保護下から脱し自立の達成に向かう時期であり、その過程を心理的離乳という(Hollingworth, 1928)。池田・大竹・落合(2006)は、心理的離乳について「子の親への関わり方」を子どもがどの様に認知しているかという観点から、青年期における心理的発達(側面より自我や能力の発達を組み込んだ)9段階の仮説を提唱している。仮説では、(1)「全面的に親を頼りにして、子が自分を親に委ねるといった関わり方」から(9)「親を頼りにすると同時に親の頼りになり、子が親を支えるという関わり方」の順に移行する。この仮説に基づけば、親との依存的な関係から能力の獲得を通して青年期に親からの分離が始まり、心理的離乳は成人期に達成される。

池田ら(2006)の心理的離乳の過程仮説では、児童期以前から抱いていた理想化された親のイメージは青年期の前期には崩壊の過程をたどるが、青年期後期に近づくにつれて親と相互協調的な関係を築き(平石, 1995)、親から愛情を受けるだけでなく、親から情緒的な支えを得ながら親を支えるように自立をなし遂げる(松井, 1998)。青年が親との良好な関係を築くことは、幸福感を生み、自我の発達や自分らしさの確立につながり(松井, 1998)、さらに自立にも関係している(田中, 2012; 水本, 2018; 大石ら, 2008; 桜庭・伊藤・横田, 2007; 山田, 2011)。水本(2018)と大石ら(2008)はそれぞれ、自立の側面として共生的な親子関係の形成が含まれること、親との信頼関係が心理的分離に影響していることを指摘している。さらに心理的自立についても、母親との関係の良好さ(桜庭ら, 2007)や、親への基本的信頼感との関連が示されていることから(山田, 2011)、青年期に心理的距離を取りながら、親との新たな関係が築かれることが自立に関与することが示されている。良好な親子関係は子の発達に伴い変化するという指摘(落合, 2002)もあり、青年たちの心理的自立にも親子関係の変化が重要となると考えられる。

1-3. 青年期の友人関係の自立への影響

親からの自立は、青年の独自の価値観の確立が求められる一方で、親が段階的に子どもとの距離を取り、干渉領域を減らしていくことが求められる相互的な課題と捉

えられる(大石ら, 2008; 落合, 2002)。しかし、独立した主体となるため親からの自立を図りながらも、未熟な青年は頼る人間を必要とする。そこで、親からの自立のため支えを必要としている青年にとって、友人に受け入れられることは重要な意味を持つ(高木, 1996; 福島, 1992)。青年期の友人関係は、共に社会的活動に取り組むことで知識や刺激を楽しむ親和システムを有する(Weiss, 1998)など、いくつかの機能があることが指摘されている(丹野・松井, 2006; 丹野, 2009; 宮下, 2012; 高木, 1996; 松井, 1998)。

青年期は親からの脱依存を遂げるとともに、友人と密接な関係を築くようになる(岡本・上地, 1999)。そして、青年期の発達課題である自我同一性の発達には、青年期における友人関係が肯定的に影響することが報告されている(川俣・河村, 2012; 松下・吉田, 2009)。これらの研究結果から、会話や触れ合いにより友人と情緒的なつながりを持つ者は、自我同一性の確実感が高いことが示唆される。青年期の友人関係において、近い他者の存在に影響を受け発達していくため、心理的自立についても友人関係からの影響を受け達成に近づくことが予想される。

1-4. 青年期における愛着対象の移行

青年期になると、親から友人へと情緒的なつながりや支えの機能を求める対象が変化する。この変化は、愛着対象の移行から説明できる。愛着とは、危険から自分を守るための「安全基地」や「避難場所」、「接近性の維持」の機能のことで、その機能を果たす者を愛着対象と呼ぶ(Bowlby, 1969)。この愛着対象は内在化され、安定した愛着を持つことで、側にいなくても不安や危険が迫る時に愛着対象として利用することが可能となる(Rholes & Simpson, 2006)。乳幼児期には強い愛着を向ける者は特定の一人に限られるが、母親や父親からその対象は拡大し、次第に友人や恋人も愛着対象として選択されるようになる(Bowlby, 1969; 片岡・園田, 2010)。他者との依存関係を基盤とした自立観を持つためには、親ではない他者を愛着対象と見なすことが関わるだろう。

さらに、先行研究では青年期の愛着スタイルと諸要因との関連が調査されている(小泉・齊藤, 2014; 村木・岡島・桂田, 2012; 久保田, 1997)。例えば、愛着の安心傾向が高い者は親や他者との間にポジティブなイメージを抱き、回避傾向やアンビバレント傾向はネガティブなイメージを有する(小泉ら, 2014)ことや、自立や協調的対人関係との関連(村木ら, 2012)、友人との親密

性との関連 (久保田, 1997) が明らかとなっている。

そこで本研究では、心理的自立の達成を他者との関係の変遷から捉えるため、他者との愛着関係の変化に着目したい。したがって、青年期において愛着対象の移行が生じ友人関係を重視することによって心理的自立の達成に近づくと仮定し、青年期の心理的自立に対し愛着対象の移行が及ぼす影響を検討する。

1-5. 心理的自立の達成過程—愛着対象の移行

本研究では、愛着対象の移行と心理的自立の過程との関連を仮定する。心理的離乳の過程において、親を頼りにし親の頼りになる関係に至り離乳が完了する (池田ら, 2006; 落合, 1995) と示されたことと同様に、心理的自立は適応的な能力を身に付け、親との関係が対等なものになることで達成に近づくと考えられる。親を再び愛着対象と見なす (片岡ら, 2010) という可能性も考えられ、心理的自立を達成した状態では愛着対象としての比重の違いがありつつも、親や友人など複数の他者と安定した愛着関係にある状態に至ると仮定する。

親からの心理的分離と、愛着対象としての友人を得て獲得される心理的自立に関わる能力が両立することで、心理的自立が達成されると考えられるが、愛着対象の移行が生じていないと、親からの分離や友人関係を通じた能力の獲得は困難となるだろう。その結果、心理的自立の達成が困難になると予想される。したがって、友人よりも親に愛着機能を求めている場合、心理的自立の達成度は低いと考えられる。

1-6. 愛着システムと親和システム

青年期の友人関係は、愛着機能と前述の親和システムの両方をみたとの見解がある (Mikulincer & Selinger, 2001)。つまり、青年期における愛着対象が複数みられる場合には、愛着対象ごとに影響を及ぼす個人の側面において異なる関連がみられると考えられる。愛着機能は、安心感や安全の感覚を得るためのものであり、親和システムは共に知識の獲得や刺激を楽しむものである (Weiss, 1998)。青年期にみられる友人関係の特徴として、安心感を得ると共に互いに影響し合い成長する友人関係の在り方は、親和システムの特徴を反映している。丹野 (2009) の作成した友人関係機能尺度には、友人関係における「安心感」、「友人からの受容」、「友人からの学習」と関連する機能も捉えられた (宮下, 2012; 高木, 1996; 松井, 1998)。したがって、本調査では、親和システムと友人への愛着機能について友人関係機能

尺度を用いて測定し、友人への愛着移行の結果として捉えることとする。

1-7. 本研究の仮説

- 1) 現在の親への愛着機能が低いほど、友人関係機能が高い。
- 2) 友人関係機能が低いほど、心理的自立が達成されている。
- 3) 親への愛着機能について過去は低く、現在は高く機能している場合に、心理的自立が高まる。

2. 方法

2-1. 調査対象者 青年期後期にあたる大学生と専門学生 102 名を調査対象とした (欠損値のある 1 名を除いた)。その内訳は男性 25 名、女性 75 名、未回答 2 名で、平均年齢は 20.7 歳 (18 歳~23 歳) であった。

2-2. 調査時期及び調査方法 2020 年 11 月中旬から 12 月初旬にかけて、Google Form による質問紙調査を実施した。分析において SPSS ver.25 を使用した。

2-3. 質問紙構成

- 1) フェイスシート 年齢と性別について尋ねた。
- 2) 心理的自立尺度 (PJS-2) 高坂ら (2006b) の作成した 6 下位尺度 30 項目、7 件法からなる尺度であり、下位尺度は「将来志向」「適切な対人関係」「価値判断・実行」「責任」「社会的視野」「自己統制」で構成されている。
- 3) 改訂版友人関係機能尺度 丹野 (2009) の作成した、9 側面 45 項目からなる尺度である。本研究では、友好的な関係を形成し、社会的活動から刺激を得るという親和システムの特徴 (Weiss, 1998) に基づき、下位尺度を選定した。質問項目として、「安心・気楽さ」、「肯定・受容」「学習・自己向上」の 3 側面 15 項目を使用した。回答は 5 件法で求めた。
- 4) 現在の親への愛着機能尺度 (AFS) 3 下位尺度 15 項目、7 件法からなる尺度であり、山口 (2009) により作成され妥当性と信頼性が確認されている。下位尺度は「安全基地」「安全な避難場所」「近接性の維持」から構成され、現在の親への愛着機能について尋ねる項目へ改変し、回答を求めた。現在の親への愛着機能に関して、教示文を「以下の文章について、あなたの親に対して、普段感じることでどの程度あてはまりますか。親を思い浮かべながら、以下の文章についてお答えください。」と提示した。
- 5) 過去の親への愛着機能尺度 (AFS) 愛着機能尺度を過去の親について尋ねる項目に改変し、小学生の頃

を回想した親への愛着機能について調べる。回答の際には、教示文を「以下の文章について、あなたの親に対して、小学生のころ感じていたこととして、どの程度あてはまりますか。親を思い浮かべながら、以下の文章についてお答えください」と提示した。

2-4. 倫理的配慮

調査への協力を依頼する際、回答することで不利益が生じないこと、個人が特定されないこと、得られた調査結果は研究にのみ使用されることを冒頭で提示した。以上のことを了承したうえで、回答するよう求めた。

3. 結果と考察

3-1. 各尺度の因子構成

各尺度の因子構成を確認するため、因子分析を行った。友人関係機能尺度と現在の親への愛着機能尺度、過去の親への愛着機能尺度において天井効果がみられたが、分析を行う上で尺度の因子構成と項目数を保つため、それらの項目も含め分析を行った。

心理的自立尺度の因子分析の結果、回転後の因子負荷量が.40に満たない2項目を除き、28項目5因子が抽出された。改訂版友人関係機能尺度に対する因子分析では、3因子が抽出された。現在の親への愛着機能尺度に対し因子分析を行った結果、従来の「安全基地」と「近接性の維持」が統合された「安全基地・近接性の維持」、および「安全な避難場所」の2因子が抽出された。さらに過去の親への愛着機能尺度に対する因子分析の結果についても、「安全基地」「近接性の維持」が統合され、2因子が抽出された。第1因子に分類された1項目が、現在の親への愛着機能尺度において第2因子に分類されていたため、両尺度の構成を等質に保つため、第1因子の1項目を分析から除外した。

3-2. 各尺度得点の性差

性差については、性別について「未回答」を選択した2名のデータを除外し100名のデータから t 検定を行った。心理的自立尺度(PJS-2)の得点は、「責任」では男性の得点が有意に高い傾向で、「価値判断・実行」、「社会的視野」では有意に高かった(順に、 $t(98)=-1.81$, $p<.10$; $t(98)=-3.15$, $p<.01$; $t(98)=-2.01$, $p<.05$)。改訂版友人関係機能尺度の得点の性差については、「受容肯定」($t(30.513)=-2.23$, $p<.05$)と「学習」($t(98)=-2.41$, $p<.05$)で、有意に女性の得点が高かった。現在の親への愛着機能尺度の得点は、「安全基地・近接性の維持」($M=5.26$, $SD=1.20$)、「安全な避難場所」($M=5.53$,

$SD=1.25$)」が共に高く、過去の親への愛着機能尺度の得点も同様に全体的に高いことから(「安全基地・近接性の維持」($M=5.50$, $SD=1.21$)、「安全な避難場所」($M=5.79$, $SD=1.08$))、本調査の対象者には、親との安定した愛着関係を築いている者が多い傾向にあった。得点の性差については、「安全基地・近接性の維持」、「安全な避難場所」共に男女間で有意な差がみられなかったことに対し、過去の親への愛着機能尺度の得点は、「安全基地・近接性の維持」($t(98)=-2.64$, $p<.05$)、「安全な避難場所」($t(98)=2.55$, $p<.05$)ともに有意に女性の得点が高いことが示された。

3-3. 現在と過去の親への愛着機能の差

次に、現在と過去の親への愛着機能の差をみるため、現在の親への愛着機能得点と過去の親への愛着機能得点で対応のある t 検定を実施した(Table1)。その結果、「安全基地・近接性の維持」と「安全な避難場所」共に、現在の親への愛着機能得点は、過去の親への愛着機能得点と比べ有意に低いことが示された。

Bowlby (1969) 曰く、青年期になると親以外の人物にも同等以上の愛着を示すとされる。その対象として友人や恋人が選択されることは、片岡ら(2010)の研究で、愛着機能の第一の対象として友人や恋人が選択されていたことから想定できる。親からの脱依存と友人関係の親密さや信頼の関連(岡本ら, 1999)が報告されており、青年期以降に親子の依存関係から脱し、友人関係を重視することは、未熟な青年が別の愛着対象を見出すための一連のプロセスであると考えられる。

3-4. 友人関係機能と現在の親への愛着機能

友人関係機能と現在の親への愛着機能の関連をみるため、友人関係機能の各因子の得点の平均値を分割点に、高群(H群)と低群(L群)に分け t 検定を実施した(Table2)。その結果、「安全基地・近接性の維持」と「安全な避難場所」の両因子で「安心気楽さ」L群よりもH群の方が、愛着機能得点が高く有意傾向を示した。結果的に、友人との関係で安心感やありのままの自分でいられる感覚を得ているほど、親への高い愛着機能を保持していることが示唆された。

「肯定受容」はH群/L群間で、現在の親への愛着機能得点において有意な差は検出されなかった。また「学習」については、「学習」H群の方が有意に「安全基地・近接性の維持」得点が高く、「安全な避難場所」得点も高く有意傾向であった。したがって、友人関係において

Table.1 現在と過去の親への愛着機能得点の平均値

		<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>t</i> 値 (<i>df</i>)
安全基地・近接性の維持	現在	102	52.6	12.0	-2.09 *
	過去	102	55.0	12.1	(101)
安全な避難場所	現在	102	22.1	5.00	-2.09*
	過去	102	23.2	4.32	(101)

注) * $p < .05$

Table.2 友人関係機能得点H/L群別 現在の親への愛着機能得点の平均値

		<i>n</i>	安全基地・近接性の維持			安全な避難場所		
			<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>t</i> 値 (<i>df</i>)	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>t</i> 値 (<i>df</i>)
安心・気楽さ	H	68	54.0	11.7	-1.75 †	22.8	4.80	-1.80 †
	L	34	49.7	12.3	(100)	20.9	5.23	(100)
肯定・受容	H	66	53.1	13.1	-.66	22.5	5.10	-1.06
	L	36	51.6	9.78	(90.4)	21.4	4.80	(100)
学習・自己向上	H	47	56.5	9.90	-3.19**	23.1	5.43	-1.77 †
	L	55	49.2	12.7	(100)	21.3	4.49	(100)

注) † $p < .10$, ** $p < .01$ 「安全基地」に関する「肯定・受容」両群比較では、Levenの検定で等分散が棄却されたため自由度が他と異なる

Table.3 友人関係機能得点H/L群別 心理的自立得点の平均値

	<i>n</i>	安心・気楽さ		肯定・受容		学習・自己向上	
		H	L	H	L	H	L
自己統制・対人関係	<i>M</i>	51.3	46.1	51.7	45.5	49.6	49.5
	<i>SD</i>	7.90	8.42	7.75	8.16	9.50	7.43
	<i>t</i> 値 (<i>df</i>)	-3.06**	(100)	-3.80***	(100)	-.04	(100)
将来志向	<i>M</i>	27.6	27.8	28.9	25.5	29.3	26.3
	<i>SD</i>	8.30	6.89	7.62	7.84	7.27	8.08
	<i>t</i> 値 (<i>df</i>)	.11	(100)	-2.11*	(100)	-1.96 †	(100)
責任	<i>M</i>	21.3	20.2	21.6	19.7	21.3	20.6
	<i>SD</i>	3.89	4.05	3.98	3.66	4.13	3.83
	<i>t</i> 値 (<i>df</i>)	-1.35	(100)	-2.36*	(100)	-.79	(100)
価値判断・実行	<i>M</i>	23.9	23.6	24.2	23.1	24.1	23.5
	<i>SD</i>	5.81	4.97	6.03	4.42	6.03	5.09
	<i>t</i> 値 (<i>df</i>)	-.23	(100)	-1.0	(100)	-.53	(100)
社会的視野	<i>M</i>	10.9	11.0	10.8	11.0	11.1	10.7
	<i>SD</i>	4.07	3.52	4.06	3.59	4.21	3.60
	<i>t</i> 値 (<i>df</i>)	.14	(100)	.21	(100)	-.57	(100)

注) † $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

Table.4 現在と過去の親への愛着機能得点4群と心理的自立得点の分散分析

			現在L/過去L (n=35)	現在L/過去H (n=12)	現在H/過去L (n=26)	現在H/過去H (n=29)	F検定
安全基地 ・近接性 の維持	自己統制・対人関係	M	49.3	48.8	48.6	50.9	F=0.41 df=98 n.s.
		SD	8.6	6.82	10.23	7.08	
	将来志向	M	27.1	24.8	27.6	29.7	F=1.22 df=98 n.s.
		SD	8.12	5.04	8.11	8.01	
	責任	M	19.9	19.4	21.7	22.1	F=2.71 df=98 p<.05
		SD	5.20	2.43	2.88	3.11	
	価値判断・実行	M	23.5	21.8	25.3	23.6	F=1.29 df=98 n.s.
		SD	5.91	4.16	4.96	5.89	
社会的視野	M	10.9	11.1	10.7	11.1	F=0.06 df=98 n.s.	
	SD	3.58	4.54	4.32	3.73		
安全な 避難場所	自己統制・対人関係	M	49	48.1	50.8	50.1	F=0.30 df=98 n.s.
		SD	8.71	5.22	7.64	9.2	
	将来志向	M	27.2	23	30.6	28.3	F=1.84 df=98 n.s.
		SD	7.96	4.57	6.54	8.53	
	責任	M	20	19.63	22.1	22.3	F=2.99 df=98 p<.05
		SD	4.47	2.67	3.14	3.18	
	価値判断・実行	M	23.1	22.4	25.4	24.5	F=1.07 df=98 n.s.
		SD	5.49	4.81	4.44	6.24	
	社会的視野	M	10.5	12.6	11.3	10.8	F=0.77 df=98 n.s.
		SD	3.36	5.01	4.88	3.87	

注) 「安全基地」「安全な避難場所」各群における「責任」得点は、Tukey法の多重比較により10%水準で現在H/過去H>現在L/過去L

自分の成長につながる交流を築いているほど、現在の親と強い愛着関係を築いていることが示唆された。

したがって、仮説1については支持されなかった。この結果は、過去の親との愛着関係で得た作業モデルと友人関係の関連が高いためと考えられる。早期の親子の愛着関係を通し、周囲や自分自身についての作業モデルが構築され、そのモデルを基に知覚や思考が行われる

(Bowlby, 1973)。これまで、自己や他者のイメージが愛着傾向に影響される(小泉ら, 2014)ことが指摘され、親子の愛着関係の在り方とそれに伴い形成される作業モデルが、その後の友人関係にも影響する(久保田, 1997)ことが報告されている。

さらに小泉ら(2014)の報告によれば、内在作業モデルが経時的に安定している場合に親子関係も良好であり、現在の親への愛着機能が果たされている場合に、過去の親子関係も良好なものである可能性が高い。したがって、友人関係における「安心・気楽さ」と「学習・自己向上」の高低は、過去の親子の愛着関係から形成された作業モデルを介した結果でもありと推察される。

3-5. 心理的自立と友人関係機能

友人関係機能の各下位尺度の得点を、平均値以上あるいは未満によってH群とL群に分割して、両群間の心

理的自立得点でt検定を実施した(Table3)。友人関係機能の「安心気楽さ」H群はL群と比較し、心理的自立の「自己統制・対人関係能力」において有意に得点が高かった。さらに、友人関係機能「肯定受容」H群はL群と比較し、心理的自立の「自己統制・対人関係能力」、 「将来志向」、 「責任」の側面の得点が有意に高いという結果が得られ、友人関係機能の「学習」については、H群がL群と比較し「将来志向」得点が有意に高い傾向にあった。以上の結果から、心理的自立の「自己統制・対人関係能力」、 「将来志向」、 「責任」の3側面が、友人関係機能と関連することが示唆された。したがって、仮説2は概ね支持された。

この結果は、青年期の友人関係と発達の在り方に沿うものである。青年期の親密な人間関係は青年期で形成される特徴的な関係であり、青年は気楽に話すことのできる友人関係を形成し維持することにより、社会的に適応する術を学んでいるとされる(松井, 1998; 宮下, 1995; 高木, 1996)。さらに、友人関係で絆を深めることが、その後の人間関係でも安心感を得ることにつながるとされており(福島, 1992)、友人との関係から対人関係について学ぶことで、広く対人関係のスキルの獲得や安定した関係の形成がなされると考えられる。

自己統制については、先に述べた友人関係の安心や気

楽さと同様に、親しい他者である友人から受け入れられるなかで、適切な自己コントロールや良好な対人関係の築き方を学ぶと推察される(松井, 1998; 宮下, 1995; 福島, 1992)。また、友人との本音でのやり取りからアイデンティティ確立に近づくことが報告されており(川俣ら, 2012; 松下ら, 2009), これは、友人を通し自分はどうような人間なのか客観的に見つめることで、自己を確立させていくためである(高木, 1996; 山岸, 1996; 宮下, 1995)。青年期における自己の確立の難しさは、社会に求められる自己と社会と拮抗する自己が共存する点に起因する(鯨岡, 2002)。その困難を乗り越えるための情緒的支えや能力の獲得の支えとして友人があり、青年は他者の評価を手掛かりとして自己を形成し、自分の適性を見つけていくのだろう(松井, 1998; 小松, 2012)。青年期の自己概念が固まることで将来について積極的に関与し、心理的自立の「将来志向」についても、友人との交流を通し自己が形成されることで、将来に向かう準備が整うために達成されると考えられる。

友人関係は、社会的活動を共にして刺激を楽しむ(Weiss, 1998; 丹野, 2006)他に、相互に理解し合う関係であり、相互に関与し支え合う関係でもある。したがって、責任を一人で背負う能力を身につけるのではなく、友人が自分を受け入れ認めてくれるため責任を負うことにも不安が軽減され(高木, 1996; 福島, 1992), 自信を得ることができるのではないだろうか。

「社会的視野」と「価値判断・実行」における友人関係との関連について、斎藤(2002)によれば、青年の政治についての関心は以前より低下しており、積極的な政治や社会への関心が低く、不満があっても社会や政治の変革を望まない傾向がある。先行研究と同様に、本調査でも心理的自立の得点において男女ともに「社会的視野」の得点が最も低い。(戸田ら, 2006b; 大石ら, 2008)。現代青年のこのような特徴から、「社会的視野」において友人関係との関連が確認されなかったと考えられる。

最も心理的自立との関連が多く確認されたのは「肯定・受容」であった。友人は、自分とは異なる独立した存在であり、親子関係とは異なり、相互に悩みや不安を支え合う存在である。他者から受け入れられることは、青年期にとって望ましい自己を確立する上での指標となる。青年期の友人関係における親密さや信頼、援助関係の様相、青年期の友人との関係が青年期の発達課題に関わることから(川俣ら, 2012; 松下ら, 2009), 青年期における友人関係の在り方は、部分的にはあるものの心理的自立にも関与する要因であることが推察された。

3-6. 過去から現在の親への愛着機能の変化と心理的自立

親への愛着機能の変化ごとの群分けについて、初めにそれぞれ平均値(Table1)を分割点として、現在と過去の愛着機能尺度の各下位尺度の得点をH群とL群に分けた。その後、過去から現在の親への愛着機能の変化ごとに分類するため、愛着機能の下位尺度ごとに4群を作成し、心理的自立得点で分散分析を実施した(Table4)。その結果、「安全基地・近接性の維持」、「安全な避難場所」共に「責任」において有意差がみられた。さらにTukey法による多重比較を実施した結果、「安全基地・近接性の維持」では「責任」得点について、現在H/過去H群は現在L/過去L群と比較し有意に高い傾向にあった。さらに「安全な避難場所」についても同様に、現在H/過去H群は現在L/過去L群と比較し有意に「責任」得点が高い傾向であった。以上の結果から、児童期において親子の間に愛着機能が十分働いているほど、かつ現在の親への愛着機能も十分働いているほど、心理的自立の「責任」の側面が高まることが示された。

この結果は、心理的自立の達成において親への愛着機能の程度の変化は重要ではなく、親との間に安定した愛着機能を有することが青年の責任感と関わることを意味する。したがって、仮説3は支持されなかった。親への愛着機能が高いほど責任感を持つという結果については、作業モデルによる自己イメージの影響が考えられる(小泉ら, 2014; 村木ら, 2012)。責任を負うことはリスクもあることから、責任を果たすことができるとの確信を持てるのは、幼少期から青年期まで親への愛着機能が機能し、安心や自信を得ているためだと考えられる。

心理的自立の「責任」以外の下位尺度との関連は示唆されなかったが、親子関係の変化と自立の関連を指摘する研究は数多くみられる(池田ら, 2006; 落合, 1995; 小泉ら, 2014; 村木ら, 2012; 田中, 2012)。本研究は、現在と過去の親への愛着機能に差が生じると仮定し、現在の親への愛着機能は想起された児童期の親への愛着機能よりも減少していることが確認された。しかし、本調査で得られた現在の親への愛着機能得点と過去の親への愛着機能得点は、共に平均値が高い傾向がみられた。特に過去の親への愛着機能は天井効果の項目が多く、調査対象者の多くが親との安定した愛着関係を築いていることがうかがえた。自立の達成は親への信頼感に関連がある(山田, 2011; 丸山, 2018)ことから、親への愛着機能得点が高い対象者が、心理的自立においても高い達成度を示したことは妥当な結果であろう。

4. まとめ

本研究の結果は、青年期の親との再接近が青年期の適応に携わることを示唆していた。児童期から現在の青年期までに親への愛着機能が減少することが示されたが、それは青年期に愛着対象としての親の存在を欠くものではない(片岡ら, 2010)といえる。青年期において親との対等な会話が自立を促し(田中, 2012)、特に母親との対立は心理的自立や抑うつと関連すること(桜庭ら, 2007)が指摘されている。青年期には愛着対象が内在化されることで、愛着対象が側にいなくとも危険や不安に直面した際に安全や安心を得ることができる(遠藤ら, 2008)。つまり、青年期においても依然として親の存在が愛着対象として機能することを意味している。自立の達成に近い青年後期の親子関係は、むしろ親密であり(池田ら, 2006; 落合, 1995)、親子の相互協調的な関係に至っており(平石, 1995)、青年期後期には次第に欠点や矛盾をもつ親を受容でき、親子関係の不調が緩和される(斎藤, 2002)と考えられる。

本研究では、青年期には他者との愛着関係が変化し、心理的自立へ向かうことが示唆された。友人関係が心理的自立に与える影響が示され、親から友人への愛着対象の移行により友人との関係が重視され、心理的自立が達成されることが示された。しかし、心理的自立は友人関係の影響を受けつつ達成に近づくが、その前提として親への愛着機能を維持した関係が重要である。心理的自立の達成において、青年が親との安定した愛着関係を保持すると共に、友人を愛着対象と認めることが求められるだろう。

本研究の愛着対象の移行と心理的自立の仮説は必ずしも支持されなかったが、一度は親からの分離過程において親への愛着機能が減少するが、青年期後期には愛着対象として見直され、その結果として愛着機能が回復することが推測される。心理的自立を達成した状態が、親へ求める愛着機能が減少するという現象のみで説明されるものではないことは、依存と自立の在り方(福島, 1992; 鯨岡, 2002)からうかがわれた。

Bowlby (1973) は、健康的な自立心があると、状況によって愛着関係の役割を交換できると指摘している。子が愛着対象として他者に頼られる関係は、友人関係に始まり、恋人関係に至る。つまり、社会化され次世代を育てる準備が整った自立した成人が、愛着関係の役割を交換できる成熟した状態にあたる。子はいずれ、次世代を育てる立場となるが、育てられる世代が育てる世代となった時、子にとって親は「かつての子ども」、親にと

っては「未来の大人」となり、親と子が相互に同一化を向け合う関係になる(鯨岡, 2002)。

また、自立の進行に伴い親子の関係が変化することは、単に子の親への関わりの変容のみではなく、親が子への関わり方を変化させることが伴う(池田ら, 2006; 落合, 2002; 田中, 2012)。これは、子の立場であった青年が能力を獲得し自立を達成することで、親の愛着対象となることを意味するものではないだろうか。親からの自立の過程で、親子の愛着関係が変容し、親と同じく社会化された人間となることで、親の子に対する在り方も変化する。成人となった子は成熟した形で他者の愛着対象として機能するため、親子でも相互対等な関係としての愛着関係を再形成することが考えられる。本研究は心理的自立と愛着対象の移行に着目しており、親子の愛着関係の変化を掘り下げることができないが、自立の延長線上にある親との愛着関係の質的变化についても、更なる研究が期待される。

最後に、本研究の限界として、男性の調査対象者が少数であったため、必ずしも結果を一般化することはできない。また、一部で心理的自立の性差が示されていた。高坂(2006b)の調査では、男性は高校生で心理的自立の達成が多少停滞し、大学生から成人にかけてわずかに達成に向かう一方、女性は中学生から大学生にかけて、心理的自立の達成が著しかった。友人関係や愛着機能の性差も考慮に入れて、心理的自立の過程に着目することが望ましい。

本研究で示された愛着対象の移行と心理的自立の関連は、青年期の自立を友人、親などの他者との関係から包括的に捉える必要性を示すものである。大学生や専門高校生に限らず、親との心理的分離が顕著である前後の年代も含めて調査することで、より詳細な発達過程を明らかにすることが望まれる。

引用文献

- Bowlby, J. (1969). Attachment and loss: Vol.1 Attachment. New York: Basic Books. (黒田実郎ほか訳(1976). 母子関係の理論 1:愛着行動 岩崎学術出版社).
- Bowlby, J. (1973). Attachment and loss: Vol.2 Separation: Anxiety and anger New York: Basic Books. (黒田実郎ほか訳(1977). 母子関係の理論 2: 分離不安 岩崎学術出版社).
- 福島朋子(1993). 自立に関する概念的考察——青年・成人及び女性を対象として—— 発達研究, 9, 73-85.

- 福島朋子 (1997). 青年における自立観：概念構造と性差・年齢差 仙台白百合女子大学紀要, 1, 15-26.
- 福島朋子・渡辺恵子 (1995). 成人における自立観 日本教育心理学会第37回総会発表論文集, 476.
- 福島 章 (1992). 青年期の心——精神医学からみた若者 講談社
- 平石賢二 (1995). 青年期の異世代関係——相互性の視点から 落合良行・楠見 孝(編) 講座生涯発達心理学 第4巻 自己への問い直し——青年期 金子書房 pp.125-149.
- Hollingsworth, L. S. (1928). The psychology of the adolescent. New York: Appleton.
- 池田幸恭・大竹裕子・落合良行 (2006). 「子の親に対するかかわり方」からみた心理的離乳への過程仮説 筑波大学心理学研究, 31, 45-57.
- 片岡 祥・園田直子 (2010). 青年期に起こる愛着対象の移行における親の位置づけ 久留米大学心理学研究, 9, 1-8.
- 川俣理恵・河村茂雄 (2012). 現代大学生の友人関係とアイデンティティ形成との関連の検討 学級経営心理学研究, 1(1), 51-58.
- 小泉茅乃・齊藤 勇 (2014). 愛着傾向が青年期の友人関係に及ぼす影響について 立正大学心理学研究年報, 6, 75-88.
- 小松貴弘 (2012). 対人関係の発達の姿 宮下一博・小松貴弘・溝口剛 大学生の心の成熟と転落を左右する対人関係の持ち方——そのメカニズムとコミュニケーションのあり方 あいり出版 pp.20-40.
- 高坂康雅 (2018). 大学生における心理的自立と経済的自立・社会観との関連 和光大学現代人間学部紀要, 11, 123-134.
- 高坂康雅・戸田弘二 (2003). 青年期における心理的自立 (I) ——「心理的自立」概念の検討—— 北海道教育大学附属教育実践総合センター紀要, 4, 135-144.
- 高坂康雅・戸田弘二 (2006a). 青年期における心理的自立 (II) ——心理的自立尺度の作成—— 北海道教育大学紀要 教育科学編, 56(2), 17-30.
- 高坂康雅・戸田弘二 (2006b). 青年期における心理的自立 (IV) ——心理的自立の発達の变化—— 北海道教育大学紀要 教育科学編, 57(1), 135-142.
- 久保田まり (1997). アタッチメントの研究 川島書店
- 鯨岡 峻 (2002). 〈育てられる者〉から〈育てる者〉へ 関係発達の視点から 日本放送出版協会
- 丸山笑里佳 (2018). ソーシャル・サポート 氏家達夫 (監修) 個と関係性の発達心理学 北大路書房 pp.122-138.
- 松井 豊 (1998). 親離れから異性ととの親密な関係の成立まで 斎藤 誠一(編) 人間関係の発達心理学4 青年期の人間関係 培風館 pp.19-52.
- 松下姫歌・吉田 愛 (2009). 大学生における友人関係と自我同一性との関連 広島大学心理学研究, 9, 207-216.
- Mikulincer, M. & Selinger, M. (2001). The interplay between attachment and affiliation systems in adolescent's same-sex friendships: The role of attachment style. *Journal of Social Personal Relationships*, 18, 81-106.
- 宮下一博 (1995). 青年期の同世代関係 落合良行・楠見孝(編) 講座生涯発達心理学第4巻 自己への問い直し——青年期 金子書房 pp.155-183.
- 宮下一博 (2012). 対人関係の意義 宮下一博・小松貴弘・溝口剛 大学生の心の成熟と転落を左右する対人関係の持ち方 あいり出版 pp.1-19.
- 水本深喜 (2018). 青年期後期の子の親との関係——精神的自立と親密性からみた父息子・父娘・母息子・母娘間差—— 教育心理学研究, 66(2), 111-126.
- 村木佑実子・岡島泰三・桂田恵美子 (2012). 青年期の愛着スタイルと自立との関連 臨床教育心理学研究, 38, 33-38.
- 岡本清孝・上地安昭 (1999). 第二の個体化の過程からみた親子関係および友人関係 教育心理学研究, 47(2), 248-258.
- 大石美佳・松永しのぶ (2008). 大学生の自立の構造と実態：自立尺度の作成 日本家政学会誌, 59(7), 461-469.
- 落合良行 (1995). 心理的離乳への5段階過程仮説 筑波大学心理学研究, 17, 5.
- 落合良行 (2002). 親離れとはどうすることか—親子関係 落合良行・伊藤裕子・齊藤誠一 ベーシック現代心理学4 青年の心理学・改訂版 有斐閣 pp.139-145.
- Rholes, W. S. & Simpson, J. A. (Eds.) (2006). Adult attachment: theory, research, and clinical implications. The Guilford Press. (遠藤利彦・谷口弘一・金政祐司・串崎正志 (監訳) (2008). 成人のアタッチメント—理論・研究・臨床— 北大路書房)
- 斎藤誠一 (2002). 青年心理へのアプローチと課題 落合良行・伊藤裕子・齊藤誠一 ベーシック現代心理学4 青年の心理学・改訂版 有斐閣 pp.25-41.

- 桜庭 蒔・伊藤菜穂子・横田正夫 (2007). 青年期における親子関係・心理的自立・抑うつに関連 日本心理学会大会発表論文集, 71, 1EV046.
- 高木秀明 (1996). 仲間関係と青年 久世敏雄 (編) 青年心理学 放送大学教育振興会 pp.74-81.
- 田中輝美 (2012). 大学生の認知する親の自立促進的態度と心理的自立の関連について カウンセリング研究, 45(4), 218-228.
- 丹野宏昭・松井 豊 (2006). 大学生における友人関係機能の探索的検討 筑波大学心理学研究, 32, 21-30.
- 丹野宏昭 (2009). 大学生の内的適応に果たす友人関係機能 青年心理学研究, 20, 55-69.
- Weiss, R. S. (1998). A taxonomy of relationships. *Journal of Social and Personal Relationships*, 15, 671-683.
- 山田裕子 (2011). 大学生の心理的自立の要因ならびに適応との関連 青年心理学研究, 23(1), 1-18.
- 山岸明子 (1996). 達成と親密性 久世 敏雄 (編) 青年心理学——その変容と多様な発達の軌跡 放送大学教育振興会 pp.127-133.
- 山口正寛 (2009). 愛着機能尺度 (Attachment-Function Scale)作成の試み パーソナリティ研究, 17(2), 157-167.